

日露戦役従軍日誌にみる戦闘の様相

元新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

【第四回】は、黒英台の戦闘状況です。

九月一日、いよいよ黒英台の敵に向かって攻撃を開始す。第二・四軍は遼陽に向かう。

晴天午前七時過ぎより我が砲門は開きたるに敵の陣地を探りしに敵も続いて応戦、益々激列の砲火を交え猛戦する。正午まで彼我の砲兵陣地に向かって発砲したり。歩兵は昼食を嗽飯し前進の命令を受け勇氣百倍す。大和男子堂々わくわくとして進み、我が第三大隊の第九中隊は聯隊の予備にして、第一線の部隊の前進約千メートル位の後方に続いて、我等の前進するに幸なるかな広野の豆栗等の畑地と藪を利用す。誅に天祐のしがらしめる沙汰なるかな。

午前八時微風だもなし。炎威暁が如き好晴天、前進開始すると同時、風も近々吹き来り。草木をなびかし歩兵前進するとああ敵に触れるわずらわしくなく。

第一線は敵の高地に堅固防御しつつ有る隊に接近す。われ交戦をなし、いよいよ壮烈なる戦闘を交え砲撃は益々砲兵陣地及び歩兵の散兵壕に向かって発砲すること七時間余の長時間に渡るも敵兵最後の決戦、中々強固なる抵抗をもって退却せず。彼我撃時休戦相対して対陣。

午後八時三十分頃またまた破竹の勢いに攻撃せり。一時間後に至り突撃し大声の高言と共に占領せり。我が軍の負傷者は第三大隊長・第十一中隊の木村中尉以下八・九十名余りなり。夕食は道明寺を以て食事とせり。これより尚各隊とも前進し、又立射掩壘を築造してその日は露営せり。

九月二日、堡壘中に潜体し警戒中、前面の高地において午前九時頃より彼我の交戦は開始。暫時敵は第一防御線を破撃せられたれば固守することを得ず、二千メートル程の後方高地まで退却す。防御工事を作造しあり。

頂場線一帯の掩壘に依り敵の兵員約四個聯隊、我が軍の第四聯隊の第一大隊及び第十六聯隊の第十二中隊と、その高地の左側の山の上まで占領し、激烈なる戦闘を交えたり。彼我の地、敵上より暫時休憩なしつつも、敵の砲弾は我が第十二中隊の散兵線内に落下し、為に負傷者多大なり。八十余なしたり。

敵兵甚だ勇にて、第二大隊の一部は応援におもむき一層猛烈なる戦闘をなし、敵益々我が軍の少数なるをあなどりて防御線より前進す。敵の砲弾もいよいよ我が軍に命中し、損害を富むること数大なり、側面を警戒し第九・第十一中隊より破竹の勢いを持って急射撃をなし掩蔽をなすや、敵は多大の損害を受けて後方高地まで退却したり。

又午後五時頃より敵兵前進し続けてくる。第九・第十一中隊の発射するも、敵兵尚後続部隊をなし前進す。上下迂回し襲撃せんとする勢いに見えしも尚急遽命令に接し、作戦上後方六・七百メートルまで退却し各部隊は防御を固守するを堅く警戒中。敵兵は楽隊を奏して逆襲に転じ来るも行動不明になるより、各方面より将校斥候を派遣し且つ松永少将は一個聯隊を以て応援に来るより、我が軍勇気百倍す。

敵兵左側より楽隊を奏し、一方は右翼より逆襲し来り時に午後十一時なり。数時間敵は払暁まで退却せず、ついに十メートル位まで接近し来るも我が軍の勇敢の勢いに驚き、せつかく逆襲まで勇壮にくるも、例の退却その又退却せざるの不利に陥り。

敵の作戦上恐るべきは、二・三名に爆裂弾を所持せしめ、我が陣地内に潜入し爆せしめたる、其れがため第三十聯隊の将校、数多く負傷したり。逆襲前後の激烈において我が軍多大なる負傷者並びに死傷者を出せり。第一軍征露中、第一の激烈なれば、したがって死傷者も多大なれば無論その負け数はいまだ詳報不明なり。

敵連続襲撃の際、死傷者を遺棄せし者にも、三百余名山となり死体をもって地を蔽うはる程多大なり。合わせても負傷者は少なくとも千五・六百以上なるべし。

九月三日晴天、払暁よりまたまた敵兵より発砲せり、我が軍防御陣地に向って急砲すること非常なるも、各部隊の断崖壕を造り、それに侵入しあること、前日の如く、炎熱のため身体を日光に焼きしため土穴内推景外にあり。

砲弾は頭上をとんで、コツコツ壕又は土人の家屋と付近の炊事するを認め発砲能く命中するなり。ゆえに数日間道明寺を食すること。敵前なればその位のことあるやとは推察しありしも、すでに戦局は此、戦上は旅順の陥落とにより雌雄の結果を得るに至るものに中々以前とは打って変わり、強国に固守すること文明国の戦闘、注意壬当なり。

夕刻、第三旅団と万歳山の前哨を交代申し送り、後方約二里下りて、松林に露營す。

以上、黒英台の戦闘でした。